

埋文センターの「安全の日」

私達の財団法人東京都埋文センターは、昭和五五年七月一日に設立されました。

この創立の日を、毎年「安全の日」と定め、センターで働く全ての人が、安全の重要性を認識し確認することになりました。

本年は、日曜日の関係で七月二日に事務所を含む全遺跡現場で、同じ時刻に、同じ内容の「安全の日」の行事が開催されました。

調査員による考古学の話や遺跡のスライドが上映されました。回を重ねる毎に内容を充実して行きたいと考えています。

働く一人一人の人間の命の尊さから、安全は出発します。昨年度と比較すると労働災害は減少していますが、そのうち通勤災害は逆に増加しています。そのほとん

トピックス

どが二輪車の事故となっています。多摩ニュータウンの交通事情は、近年、道路の整備、拡張、車輛の増加等大幅に変化してきました。まず、交通規則を守ることが、自分の命を守ることであることを知る必要があります。なお、毎年七月一日から



現場での安全大会

一週間は、全国で「安全週間」の行事が開催されます。その目的は、働く全ての人が、災害防止の誓いを新たにし、日常の安全活動を充実させることです。

センターの「安全の日」は、「ゼロ災害への誓いの日」でもあります。(齊藤)

たまのよこやま

(財)東京都埋文センター報 No.2 昭和59年9月15日



多摩ニュータウンNo.513遺跡出土 高さ22.9cm

昭和五九年度の職員研究助成の対象となる研究課題が、次の通り決定し、七月二七日理事室において授与式を行いました。

グループ研究
「中・近世陶磁器からみた多摩ニュータウン遺跡の様相」甲崎光彦他三名
「土器群の様相からみた地域的交流と情報の流れ」小葉一夫他二名
個人研究
「集落遺跡の分析からみた古代末期における村落構造の研究」尾垣勝彦
「後期古墳出土の鉄鏝について」飯塚武司

八月二日 活力ある都政をすすめる懇談会の最終報告が発表された。このなかで、外郭団体の都の事務事業を代行させているものについては、執行体制を整備し、事業執行の機動性、弾力性を強めるなど、指導監督体制の強化を図るべきであると指摘しています。

八月八日 文化庁の垂木文化財保護部長、田村記念物課長、河原主任文化財調査官の三氏は、建築中の都立埋文センター調査普及施設と鹿島収蔵庫および多摩ニュータウン遺跡No.388、No.421の発掘現場を視察されました。



視察のようす

九月三日 中国陝西省人民政府の魏外事弁公室主任、李文化文物庁長、孫蘭翼対外演出公司の通訳等の四氏が当センターを訪れ、日本の埋文センターの発掘と保存・管理等について見学するため、町田市小山田No.1遺跡、多摩ニュータウンNo.421遺跡、鹿島収蔵庫等を視察されました。

八月十六日 多摩カントリークラブ東側のNo.5遺跡の発掘状況が、「おはようテレビ朝日」の番組で、生中継で放映された。説明は石井調査課長、佐藤係長、原川調査員がおこなった。

七月一日付で、渡辺芳郎経理係長が教育庁人事部長に定課へ転出し、その後任に同課から富永弘が就任しました。渡辺さん、ご苦労さまでした。

▽題字の揮毫は、早稲田大学名誉教授であり、また当センター理事でもあるある滝口宏先生からいただきました。誌面をおかりして、お礼を申し上げます。

発行
財団法人 東京都埋文センター
〒206 東京都多摩市
落合1-958
☎ 0423-73-5296
0423-74-8044
昭和59年9月15日

「常滑三筋壺」のひとり言

私の生まれは知多半島は常滑、12世紀中、後半頃(平安時代末期)に生まれたと言われております。胴部に三筋の刻線があることから人呼んで「常滑の三筋壺」と申します。

生後、流転の末、縁あって武蔵国稲城の豪族にもらわれ、通称大丸城跡のある丘陵に、銅製経筒2本と渥美産の壺と共に河原石でおわれて埋められました。

私が生まれた頃、仏教界に末法思想の動きがあり、都の貴族や各地の豪族方は将来の仏法再来を祈願して仏典を写経して地中に埋納しました(経塚)。私の兄弟達が発見されるほとんどの場合、経塚に埋められたり、火葬骨を容れる蔵骨器として使われております。しかし、私の場合、渥美の壺ともども、中には何も容れられておりませんでした。このことは、一つの謎であります。(加藤)



今回は八王子市松木地区のNo.388遺跡を紹介いたします。遺跡は八王子市松木一号にあり、北側に大栗川と大田川との合流点をそのむ北向きの緩やかな斜面地に立地しています。大栗川の川沿いには、各時代の大規模な集落遺跡が点々と並んでおり、これまでもいくつもの遺跡がすでに調査され、内容がわかっています。No.388遺跡もそれらに続く遺跡の一つと考えられています。

対象に、今年の四月から九月までの予定で進めています。現在、先土器時代の調査を一部終了して、他の調査はすべて終了してはいますが、これまでに先土器時代から江戸時代までの遺構、遺物が多数発見されています。

先土器時代

土器の使用が始まる縄文時代よりも前の時代で、東京都内では、約三万年前から一万年前くらいまでの遺物が発見されています。いずれも関東ローム層といわれる赤土の中に埋まっていて、No.388遺跡では約二万五千年前から一万年五千年前くらいまでの間に盛んに使用されたナイフ形石器と、細石器・尖頭器という土器の使用が始まる直前(約一万二千年前)の石器群と二つの時期に分かれる遺構が発見されています。ナイフ形石器の使用方法についてはよくわかっていますが、槍の穂先として使用された



No.388 遺跡出土の先土器時代遺物

されたもののように。石器の形がこのように変化していくのは、氷河期の寒い気候がだんだんと暖かくなるにつれて、これまで狩の対象にしていたノウマン象やオオツノジカなどの大型獣が次第にいなくなり、道具の改良を余儀なくされたためと考えられます。この

時代の生活の跡は、石器を作る際にできる石屑などが発見されることにより確認されますが、この遺跡からはこのような石屑の残る場所が10数カ所も発見されています。

縄文時代

動物を獲る陥穴と考えられる土坑が41基と、石鏃、打製石斧などの石器が少量発見されています。住居跡が発見されていないので、この場所が生活の拠点として使われたことはなかったようです。

平安時代

9世紀の初めから中頃にかけで作られた堅穴住居跡が10軒発見されています。いずれも8〜10畳程度の広さをもつ方形の堅穴で、壁の一边には造りつけのカマドが設けられています。これらの住居跡は、そこから発見される土師器や須恵器



平安時代の住居跡・カマド

によってその年代を知ることができそうですが、同時に発見される他の遺物(ここでは紡錘車・鉄鎌・砥石)によっても、その性格を推測することもできます。ここから発見された10軒の住居跡は、土器の年代から一時期3〜4軒の集落と考えられ、その性格は、これまでに調査されている大栗川沿いの他の遺跡と同様に、川沿いに点々と並ぶ農耕集落の一つと考えられます。(松井)

文化財講座<2> 遺跡の種類

遺跡を発掘すると、いろいろな遺構や遺物が発見され、それによって遺跡にもいろいろと顔つきの違ったものがあることがよくわか

る。遺跡にこのような違いがあるのは、当時の人々がそこで何を行なったかという行動の内容が、遺跡によってそれぞれ異なっていたからであり、このような違いを取り上げて研究することによって、当時どのような

ことが行われていたかを知ることができるようになる。ただ、今日、我々が遺跡として確認することができるのは、当時の人々の行動が遺構や遺物というかたちで残されている場所に限られるため、遺物が腐ってなくなってしまう場所や、弓を用いて狩猟を行なった狩



縄文時代中期の墓

場、クリ、クルミを採取した場所などは、当時それが頻繁に行われた行動であったとしても、それを痕跡として土地にとどめないものは、遺跡としてその場所をとらえることは非常にむずかしい。このように、遺跡には我々が知りたいと思うこととは関係なく、残りやすいもの

(可児)

が残り、残りにくいものが消えてなくなってしまうのである。しかしながら、文字による記録がない時代においては、遺跡は過去を知ることでできる唯一の手掛りとして重要であり、どのような些細な痕跡といえどもおろそかにはできないのである。

遺跡にどのような種類があるかは、その土地の自然環境や、それぞれの時代の社会の動き、生活様式の違いなどがあって一様ではない。地域や時代による違いが、ここにはそれらを逐一取り上げて説明することはしないが、世の中が進んで社会が複雑になり、生活内容が豊富になるにつれて、遺跡の種類も増えるようである。特に多摩ニュータウン地域の調査では、遺跡は細大もろさず網羅されているため、これまで過去が空白に近かったこの地域も今や一変して最も良く知られた地域に変わろうとしている。

多摩の歴史を訪ねて②

高勝寺のカヤ

人里でみかける大木には、人間とのかかわりを強く感じさせるものがある。社寺の境内には、しばしば御神木などとして手厚く保護されている大木があり、これらは自然の樹木ではあるが、人が作り上げた歴史の産物のようにも思われる。

稲城市坂浜にある高勝寺の本堂裏手には、幹囲約6m、高さ約二五mのカヤの大木がある。梢の方が折損してはいるが、都内でも数少ない大木で、昭和三六年に都の天然記念物に指定された。蟬しぐれの中を訪ねてみると、根元のすぐ近くを京王相模原線が走っており、この工事の際に、根はかなり痛めつけられたに違いないが、樹勢はきわめて旺盛で、枝先には実をたわわにつけていた。



寺は僧鎮海によって、

応安元年(一三六八)に創建されたが、本尊は藤原期の作と考えられる木造の観世音菩薩像で、カヤの木ともども都の文化財に指定されている。

カヤの大木と観音さまとの間にはまったく関連性がないようにもみえるが、誕生がともに同じ頃になる可能性もあり、両者は多摩丘陵の歴史を物語る証人として、現在もその姿を我々の前にみせてくれているのである。

高勝寺は京王相模原線の稲城駅から南西へ約一・五km、鶴川(旧大山)街道の左手にみえる台地上にある。境内には高勝寺自然公園と名づけられた牡丹園があり、毎年四月下旬の開花期に公開されている。(千野)